

『太平經鈔』卷五（十一葉表五行、十二葉裏七行）

二〇二三年三月二十五日 趙ウニル

【原文①】

凡愚之術、皆從内出、自有法律。厚爲本根、見神而活、亦無苦愁。神惡勞烈、安心定意、慎無暴卒。

久久自靜、萬道俱出、長存不死、與天相畢。爲之必和、與道爲一、賢持無置、凡事已畢。俗念除去、與神交結、乘雲駕龍、雷公同室。軀化而爲神、狀若太一。詳思書言、慎無失節。

【書き下し文①】

凡愚の術、皆内より出で、自ずから法律有り。厚く本根を爲し、神を見て活き、亦た苦愁すること無し。神は勞烈を惡み、心を安んじ意を定め、慎んで暴卒すること無かれ。久久に自ずから静まれば、萬道俱に出で、長く存し死せず、天と與に相い畢う。之を爲すこと必ず和し、道と與に一を爲し、賢く持し置く無ければ、凡事已に畢る。俗念を除去し、神と與に交結すれば、雲に乗り龍を駕け、雷公と室を同じくす。軀化して神と爲り、狀は太一の若し。詳く書言を思い、慎んで節を失うこと無かれ。

【現代日本語訳①】

凡人の道術はすべて内から出で、自然に法則や規律を備える。深厚に根本を追求して、神を見れば生き生きと（生命力を）活かし、苦しく思い悩むことがなくなる。神はこき使うことを嫌がるので、心を平穩にして思いを安定させ、慎んで急死することがないようにせよ。（Level1:凡愚→静…從凡入道）

長らく自らを静まりかえすことができれば、あらゆる道がともに出で、長く生きて死せず、天とともにすべて完結する。そのためには必ず調和し、道と合一し、賢く保ちつづけて放棄しなければ、すべての事が完結し終わる。（Level2:静→守一…賢）

世俗的な考えを捨て去り、神と交流を結べば、龍の引く雲車に乗り、雷神と空間を共にし、からだは変化して神となり、そのすがたはまるで太一のようなになる。詳細に書にある言葉を考え、決して節度を失わないようにせよ。（Level3:↓神変自在）

【注①】

○凡愚之術、皆從内出

『太平經』卷七三至八五戊部五至十七・闕題

大慈孝順闔第一。慈孝者、思從内出、思以藏發、不學能得之、自然之術。行與天心同、意與地合。上有益帝王、下爲民間昌率、能致和氣、爲人爲先法。

『太平經鈔乙部』上士爲君、乃思神真。中士爲君、乃心通而多智。下士爲君、無可能思、隨命可爲。

守一明法「守一明之法，長壽之根也。」

○自有法律

『莊子』徐無鬼

招世之士輿朝，中民之士榮官，筋力之士矜難，勇敢之士奮患，兵革之士樂戰，枯槁之士宿名，法律之士廣治，禮教之士敬容，仁義之士貴際。

(↓招世>中民>筋力>勇敢>兵革>枯槁>法律>禮教>仁義)

『太平經』卷五五·知盛衰還年壽法

天之授事，各有法律。命有可屬，道有可爲，出或先或後，其漸豫見。

○厚爲本根

『莊子』知北遊

……惛然若亡而存，油然不形而神，萬物畜而不知。此之謂本根，可以觀於天矣。

○見神而活

『太平經鈔癸部』盛身卻災法

故天地立身以靖，守以神，興以道。故人能清靜，抱精神，思慮不失，即凶邪不得入矣。其真神在內，使人常喜，欣欣然不欲貪財寶，辯訟爭，競功名，久久自能見神。

『太平經』卷九六「守一入室知神戒」

其三部界者，夫人得道者必多見神能使之。……上爲帝王除災病，中爲賢者除疾，下爲百姓除惡氣，……見神以占事。

○安心定意

『後漢書』梁節王暢傳

梁節王暢，永平十五年封爲汝南王。……今王深思悔過，端自克責，朕惻然傷之。……一日克己復禮，天下歸仁。王其安心靜意，茂率休德。

○萬道俱出、長存不死

『太平經鈔乙部』題缺

真人問，「神人何以能知此乎。神人言，以無聲致之。君欲仁好生，象天道也。臣欲柔而順好養，法地道也，即善應出矣。故天地不語而長存，其治獨神，神靈不語而長仙，皆以內明而外闇，故爲萬道之端。」

○賢持無置、凡事已畢。俗念除去、與神交結

『太平經』卷一二·寫書不用徒自苦誠

無知之人各戒，此戒尤深徹。生過罰輕重，皆從人起，非但空虛，輒有所受。天性自然，不可

欺矣。熟念無置，行成天神矣。

『太平經』卷九八·神司人守本陰祐訣

故後世讀吾文書，從上到下，盡睹其要意義而行者，萬不失一也。守之不置，自然畢也。專心善意，乃與神交結也。邪心惡意，道必失也。

○乘雲駕龍

『太平經』卷九九「乘雲駕龍圖」

『莊子』逍遙遊

（肩吾）曰，『藐姑射之山，有神人居焉。肌膚若冰雪，淖約若處子。

不食五穀，吸風飲露。乘雲氣，御飛龍，而遊乎四海之外。其神凝，使物不疵癘而年穀熟。

『管子』水地

龍生於水，被五色而游，故神。欲小則化如蠶蠋，欲大則藏於天下，欲尚則凌於雲氣，欲下則入於深泉。

『太平經』卷九三

神人語真人言，古始學道之時，神遊守柔以自全，積德不止道致仙，乘雲駕龍行天門，隨天轉易若循環。

『太平經』卷七一·致善除邪令人受道戒文

（神人言，）……吉者日進，邪者上休矣。持心若此，成神戒矣。成事，乘雲駕龍，周流八極矣。

○雷公

『楚辭』遠游

左雨師使徑侍兮，右雷公以為衛。

○軀化而為神、狀若太一。詳思書言、慎無失節。

『太平經』卷七·學者得失訣

失天道意矣。使人身自化為神者，是也。身無道而不成神，自言使神者，非也，但可因文書相驅使之術耳。

『莊子』天下

以本為精，以物為粗，以有積為不足，澹然獨與神明居。古之道術有在於是者。關尹·老聃聞其風而悅之，建之以常無有，主之以太一，以濡弱謙下為表，以空虛不毀萬物為實。

『太平經』卷九八·包天裏地守氣不絕訣

子欲不終窮，宜與氣為玄牝，象天為之，安得死也。亦不可卒得，乃成幽室也。入室思道，自不食與氣結也。因為天地神明畢也，不復與於俗治也。乃上從天太一也，朝於中極，受符而行，



周流洞達六方八遠、無窮時也。子思書言、自得之也、爲神之階可見矣。
『太平經』卷一一四・大壽誡
宜思書言、其文具足、可以自護、必得天福。

【原文②】

凡精思之道、成於幽室、不求榮位、志日調密、開蒙洞白、類似晝日。不學之時、若夜視漆、東西南北、迷於其室、令賢聖惶悚、心獨戰慄。五守已強不死亡、安貧樂賤可久長。賤反求貴道相妨、尊官重祿慎無望。強求官位道即亡、不若除臥久安床。不食而自明、百邪皆去、遠禍殃。守靜不止不喪。幸可長命而久行、無敢恣意失常。求之不止爲道王、治活之術各異方、與民殊事、不相妨。

上之好生、民命久長。俗教道上有仁王、聖主思道化下流行、令民清廉。永無禍殃、民之不死、上之明也。上無明君教不行、不肯爲道反好兵、戶有惡子家喪亡、持兵要人居路傍、伺人空閑奪其裝、縣官不安盜賊行。

【書き下し文②】

凡そ精思の道、幽室より成し、榮位を求めず、日び調密することを志し、開蒙し洞白すること、晝日に類似す。學ばざるの時、夜に漆を視るが若く、東西南北、其の室を迷い、賢聖をして惶悚せしめ、心獨り戰慄す。五守已に強めて死亡せず、安貧樂賤して久長す可し。賤は反つて貴を求めて道と相い妨げ、尊官重祿は慎んで望む無かれ。強いて官位を求むれば、道即ち亡び、除いて臥して久く床に安んずるに若かず。不食にして自ら明るく、百邪皆去り禍殃を遠ざかる。靜を守ること止まざれば喪わず、幸いに長命にして久行す可く、敢えて恣意に常を失うこと無し。之を求めて止まざれば道の王と爲り、治活の術各おの方を異にし、民と與に事を殊にしても、相い妨げず。

上の生を好むば、民の命久長す。俗教の道、上に仁王・聖主有りて、道を思い下に化して流行せしめ、民をして清廉せしむ。永く禍殃無く、民の不死、上の明なり。上に明君無くんば教え行わず、肯て道を爲さずにして反つて兵を好み、戸ごとに惡子有り家喪亡し、兵を保持して人に要むるは路の傍に居り、人の空閑を伺い其の裝いを奪い、縣官安んぜずにして盜賊行わる。

【現代日本語訳②】

すべてこと細かく考える道は、幽室（暗く奥深い室）から生み出され、名譽のある地位は追求せず、日増しに緻密に調和することを志し、無知を導き明白なことに通曉すること、お昼のようであった。（道を）悟っていない時は、まるで暗い夜に真っ黒のものを視るように見分けられず、東西南北どこへ行っても、その（幽）室がどこにあるか迷ってしまい、徳の高い人材すら恐怖に驚かせ、心はただ戦い震えるだけである。が、（内にある）五つをしつかり

守ることにはげんでいれば死亡せず、貧窮を何ともせず低い地位に安樂し長く長寿することができる。低い地位は反って尊貴を追求して道と互いに妨げになるので、高い官位と高い俸給を決して望んではならぬ。官位を無理に追及すると道はただちに消えてしまうので、(そのような出世志向は)官を退けて横になって長くベットでのんびりすることに及ばないのである。五穀を食べないことで自然に通明になり、あらゆる邪悪なものがすべて去っていき禍殃から遠ざかる。

靜を守り続けて死亡せず、幸いに長く存命して久く行い、思いをほしいままにして平常を失うことはどうしてもしない。(道を)追求することが止まらなければ道の王となり、統治の方術が各々異なっても、民の事柄と異なっても、互いに妨げない。

君主が生を大切にすれば、(その)民は長寿する。世俗の教えの導きには、君主に仁をもつ王と聖なる君主がいて、道について考えて下々を教化し道の行いを伝え広げ、民を清廉にさせる。ながく災難や事故がなく、民が死なないのは、その君主が賢明だからである。君主に賢明な君がいなければ教化は行われず、積極的に道を行うことはせず、逆に兵を好んでしまい、家ごとに悪子がいて家は滅んでしまい、兵器を持って人に(無理やり)要求し道端に追いつき出し、人の隙を狙ってその装いを奪うので、縣官は平安にはいられず盜賊があちこちで行われる。

【注②】

○凡精思之道、成於幽室

『莊子』人間世

瞻彼闕者。虛室生白，吉祥止止。夫且不止，是之謂坐馳。

『太平經』卷九八・神司人守本陰祐訣

真道者多善，其文乃入神，故能睹神，與神爲治。所治若神入神，則真道也。乃多成於幽室，或有使度於室中而去者，或有一出一入未能去者，或有但見神而終古不去者。

『太平經』卷九八・包天裏地守氣不絕訣(既出)

子欲不終窮，宜與氣爲玄牝，象天爲之，安得死也。亦不可卒得，乃成幽室也。入室思道，自不食與氣結也。因爲天地神明畢也，不復與於俗治也。乃上從天太一也，朝於中極，受符而行，周流洞達六方八遠，無窮時也。子思書言，自得之也，爲神之階可見矣。

『太平經』卷三六・三急吉凶法

故古者聖賢飲食氣而治者，深居幽室思道，念得失之象，不敢離天法誅分之間也。

『太平經』卷七十學者得失訣

入室始少食，久久食氣，便解去不見者，是也；求道，自言得之不還，反有問者，非也。凡去者悉還，有教問者是也，而無教問者，而容死也。守清靜於幽室，成者是也，自言得道行，以怒語言者，非也，失精之人也。

『太平經』卷九六・忍辱象天地至誠與神相應大戒

真人但安坐深幽室閑處，念心思神，神悉自來到，……。

○戰慄

『論語』八佾

哀公問社於宰我。宰我对曰，夏后氏以松，殷人以柏，周人以栗，曰使民戰栗。子聞之曰，成事不說，遂事不諫，既往不咎。

『太平經』卷五一・校文邪正法

純稽首戰慄再拜。

『太平經』卷五三・分別四治法

真人純稽首戰慄，……。

○五守

『太平經』秘旨

守一之法，內有五守，外有六候，十一之神，同一門戶。

○安貧樂賤

『後漢書』蔡邕傳

夫子生清穆之世，稟醇和之靈，覃思典籍，韞積六經，安貧樂賤，與世無營，沈精重淵，抗志高冥，包括無外，綜析無形，其已久矣。

○不食

『莊子』逍遙遊（既出）

（肩吾）曰，藐姑射之山，有神人居焉，肌膚若冰雪，淖約若處子。不食五穀，吸風飲露。乘雲氣，御飛龍，而遊乎四海之外。

『太平經』卷九八・包天裹地守氣不絕訣（既出）

子欲不終窮，宜與氣爲玄牝，象天爲之，安得死也。亦不可卒得，乃成幽室也。入室思道，自不食與氣結也。因爲天地神明畢也，不復與於俗治也。乃上從天太一也，朝於中極，受符而行，周流洞達六方八遠，無窮時也。子思書言，自得之也，爲神之階可見矣。

○守靜

『老子』第16章

致虛極，守靜篤，萬物並作，吾以觀復。

○殊事

『禮記』樂記

禮者殊事，合敬者也。樂者異文，合愛者也。（疏：尊卑有別，是殊事。俱行于禮，是合敬也。）

○好生…前回金先生のレジュメを参照。

【原文③】

觀民可爲上可明、人君好仁、下求長生。上之不仁、下多邪傾、皆令夭死、不知樂生。下愚好德、上教令也。民之好道者、其主明也。盡欲長生、遠禍殃也。不食廉潔、去諸兵也。垂拱無爲、棄不祥也。聖主大興、其民相親也。恩及下愚、是其王也。天道好生、以安上也。下愚不爭上之慶、天下幸甚、莫不歸王也。

民不好道者、上之不明也。內懷姦心明（不）行也。不好爲德、反好兵也。父子分離、居道傍也。不得長生、積死喪也。家有貧子、若虎狼也。上之無德、兵禍殃也。下愚爲君、化不行也。

民多好仙、帝王明也。天見其治、恩下行也、蚊行喘息、皆被光也。

【書き下し文③】

民の爲す可きを觀れば、上は明なる可く、人の君は仁を好み、下に長生を求む。上の不仁なれば、下に邪傾多く、皆夭死せしめ、生を樂しむるを知らず。

下愚の德を好むは、上の教令なり。民の道を好む者、其の主明なればなり。盡して長生せんと欲し、禍殃遠ざければなり。食わずして廉潔し、諸兵を去るなり。垂拱にして爲すこと無ければ、不祥を棄つるなり。聖主大いに興り、其の民は相い親しむなり。恩下愚に及ぶは、是れ其の王なり。天道は生を好み、以て上を安んずるなり。下愚の争そわざるは上の慶（び）なりて、天下の幸甚、王に歸せざる莫きなり。

民に道を好まざる者、上の不明なればなり。内に姦心を懷くは明の（不）行なればなり。徳爲るを好まざるは、反つて兵を好むなり。父子分ちて離れ、道の傍に居るなり。長生を得ず、死喪を積むなり。家に貧子有り、虎狼の若きなり。上の徳無きは、兵の禍殃なり。下愚の君爲れば、化行わざるなり。

民多く仙を好むは、帝王の明なればなり。天は其の治を見、恩下に行くなり、蚊行喘息、皆光を被るなり。

【現代日本語訳③】

民が（道を）行うることを觀れば、その君主は賢明であることが分かり、人の君主は仁を好み、下々の長生きを希望する。君主が仁でなければ、下々の人の中には邪に傾く人が多く、みな夭折させてしまい、生を樂しむことを知らない。

下愚の人が徳を好むことは、君主の教化のおかげである。民の中で道を好む人がいるのは、その君主が賢明であるからである。できるだけ長生きしようとし、災禍を避け、穀物を食べずにして欲なく汚れなく、あらゆる兵器を捨てるのである。たもとをたらし、腕を組み、自らにはなにもせず、縁起の悪いものは捨てるのである。聖なる君主はとてもあまねく榮えさせ、その民は互いに仲良くなるのである。（道の）恩恵が下愚にまで及ぶことができるのはかれら

の王のおかげである。天道は生を好むことで、君主を安定させるのである。下愚が（仲良くして）争そわないことは、君主には祝うべきことであり、天下のたいへんな幸せは、（もとの持ち主である）王に戻らないものはないのである。

民の中で道を好まない人がいるならば、それは君主が賢明でないせいである。心の奥底に姦心を抱くことはその賢明（が）行（きわたっていないの）である。徳ある人になることを望まない人は、（それを好まないだけでなく）反対に兵（術）を好むのである。（そうになると）親子はバラバラになって離れてしまい、道端に追い出してしまふ。（そうであるので）長生きすることができず、葬儀の数だけ増えるのである。家には貧しい子孫があり、飢えて虎や狼のようになる。君主に徳がなければ、兵事の禍殃が起こる。下愚の君主でありながら、教化が行われなかったためである。

民の中に多くの人が仙を好むことは、帝王が賢明であるからである。天は帝王の統治を見て、（天の）恩恵を下々にまで流すので、這いながら喘ぐもの、すべてが（恩恵の）光を受けるのである。

（好仁↓好徳↓好道↓好仙）

【注③】

○上之不仁

『老子』第5章

天地不仁，以萬物為芻狗。聖人不仁，以百姓為芻狗。天地之間，其猶橐籥乎。虛而不屈，動而愈出。多言數窮，不如守中。

↓『太平經鈔』「上之不仁」は『老子』の「天地不仁」「聖人不仁」とは文脈が違ふ。『老子』は「仁」に否定的であるが、『太平經鈔』は仁に肯定的のように見える。『老子』第38章「上仁為之，而無以為」の「上仁」ということか？

○下愚

『太平經』卷七一・致善除邪令人受道戒文

有天命者，可學之必得大度，中賢學之，亦可得大壽，下愚為之，可得小壽。

『太平經』卷七二・不用大言無效訣

上賢明見吾書言之，必大覺矣。中賢見吾文言，必小覺。下愚不覺，反笑吾書不備其本，已自窮矣。

○垂拱

『書』周書・武成

惇信明義，崇徳報功，垂拱而天下治。

○下愚不爭

『老子』第3章

不尚賢，使民不爭。不貴難得之貨，使民不為盜。不見可欲，使民心不亂。

『老子』第68章

善為士者不武，善戰者不怒，善勝敵者不與，善用人者為之下，是謂不爭之德。是謂用人之力。是謂配天。古之極。

○參考…好仁↓好德↓好道↓好仙

『老子』第38章

上德不德，是以有德；下德不失德，是以無德。上德無為，而無以為。下德為之，而有以為。上仁為之，而無以為。上義為之，而有以為。上禮為之，而莫之應，則攘臂而扔之。故失道而後德，失德而後仁，失仁而後義，失義而後禮。

○蚊行喘息

『淮南子』天文訓

天神之貴者，莫貴於青龍，或曰天一，或曰太陰。太陰所居，不可背而可向，北斗所擊，不可與敵，天地以設，分而為陰陽，陽生於陰，陰生於陽。陰陽相錯，四維乃通。或死或生，萬物乃成。蚊行喙息，莫貴于人，孔竅肢體，皆通於天。